

# かさまのれきし

第66回

## 金剛寺の香時計こうどけい

国道五〇号の石井交差点から県道一号を宇都宮方面に二キロメートル程進むと、右側に「真言宗箱田山」地蔵院金剛寺」と刻まれた門柱が見えてきます。石段を上り山門をくぐると、江戸時代、文化年間に建造された本堂が姿を現します。山号・院号は、箱田山地蔵院。創建は鎌倉時代初期、賀海和尚による開基とされ、地蔵菩薩を本尊としています。この金剛寺は、市指定文化財の香時計を寺宝として所蔵しています。

香時計とは、香が安定して燃え進む性質を利用した火時計の一種で、中国から日本に伝来したといわれています。古くから寺院の儀式、香や火を絶やさぬ仏具として用いられてきました。金剛寺の香時計は、江戸時代の作といわれていますが、作者は不明です。形は縦横各三三・六センチメートル、高さ三九・五センチメートルの箱火鉢で、ヒノキ材で作られています。香を焚く盤面には灰が入っています。この灰は木灰や薬灰で、数日前から水で灰のあく抜きをし、よく乾燥させ、ふりにかけるなど準備が必要です。

使い方は、まず灰ならしで均した灰の上に、溝をつける香型を置きます。香型で作った溝に沿って抹香を同じ厚さに埋め、香型を外すと、抹香の回路ができあがります。この回路の端に点火し、香の燃え進んだ長さによって時間の経過を知るといふものです。

この香時計は盤面が四つに分かれており、一つの回路の燃焼に約六時間、四つすべての回路を使うと一昼夜燃え続けます。そのため常香盤・時香盤とも呼ばれます。

香を焚いている間は、格子状の蓋を被せて使われていました。格子が時刻を知る目盛りになったと考えられます。また、箱火鉢の下部には、抽斗が付いていて、香入れ、馬棟、灰ならし棒などの付属の道具一式を収納できるようになっています。

金剛寺の香時計は、時間に追われること多い現代において、香の燃える芳しい匂いで時を計った先人たちの豊かな感性を垣間見ることのできる貴重な工芸品です。

(市史研究員 松山京子)



香時計



香時計の道具